

瑩山禪師の目ざしていられるもの

山 田 靈 林

瑩山禪師は御幼少のそのときから五十八歳で御入寂になつたその日まで、いやその日から六百幾十年を経た今日も乃至生々世々をつくして一瞬の間斷もなく『目ざしていらせられるもの』がある。禪師の御眞筆の文字や御親述の書物を拜覽していると、それが全身心に徹して感じられてくる。

禪師の御眞筆の文字は幾種も現存している。總持寺に祕藏されている『御肖像畫の御自贊』や『總持寺緣起——諸岳觀音堂之記』それから永光寺に祕藏されている『永光寺盡未來際置文』その他がある。

それから御眞筆のものではないが、禪師が御手控として乃至は隨感隨想として紙片に書いて手文庫におさめて置かれたものを、後で纂輯して一冊の書物にしたという感じのする『洞谷記』が現存している。この中に禪師の『御自傳』がおさめられている。禪師が慈母の念持佛をまつり慈母の遺志を

堅持いたすために建てられた寺の開創記『勝蓮峰圓通院緣起』もおさめられている。『洞谷山永光寺開創緣起』もおさめられている。『傳燈院五老悟則並行業記』もおさめられている。その他に禪師詠の『詩歌』や『夢の記』『發願文』などもおさめられている。

禪師の親述の書物として廣く知られているのには『傳光錄』『信心銘拈提』『坐禪用心記』『三根坐禪說』『祕密正法眼藏』『十種勅問奏對』『瑩山禪師語錄』『瑩山清規——洞谷山永光寺行事之次序』などがある。

また禪師の傳記を記述している書には『三大尊行狀記』『總持兩祖行錄』『太祖傳』『常濟大師御傳記』などがあり、『日域洞上諸祖傳』『日本洞上聯燈錄』『扶桑僧寶傳』『延寶傳燈錄』『本朝高僧傳』などその他いろいろある。

右のごとき御眞筆の文字や御親述の書物や傳記書を拜覽し、また總持寺永光寺を初め禪師自身が開創いたされた寺々、禪師の法子法孫が開創いたされた寺々、乃至その寺々の檀越

信人についての見聞を深めれば深めるほど、禪師の『目ざしていらせられるもの』がまじまじと感じられて悚懼なきを得ない。

この稿は去る十一月二十一日、禪師の『降誕會』の日の宗學大會に於て『禪師の目ざしていられるもの』と題して研鑽の一端を申し述べることにしたとき、草案したものに、多少加筆したものである。

二

道元禪師から有りがたいお導きを、じかに身近にいただくことのできる書をあげるときに、十人が十人ながら先ず第一にあげるのは『正法眼藏隨聞記』である。それと同じように瑩山禪師のお導きを、身近にいただくことのできる書は『洞谷記』である。特にその中におさめられている『勝蓮峰圓通院開創緣起』や『永光寺開創緣起』それから禪師御入寂の年にお立てなされた『二大誓願』等がそれである。ただしそれから洞谷記の文章が何れも漢文で書かれているがためでもあるうか、拜讀する人が極めて少いようである。

よつてここにその『勝蓮峰圓通院開創緣起』を和文に書き下し、區切に數字をつけ、更に理解に便宜のため、カットに註解をも入れて挿んでかかげることにする。

(一)

同六月十八日（元享二年壬戌・西紀一三三二・禪師五十五歳の六月十八日）勝蓮峰（洞谷山の中の小高い處）に圓通院を建て、當山本主祖忍大姉（洞谷山永光寺の開基家滋野信直氏の夫人默譜祖忍法尼、三年前に出家）に與う。

本尊は予が今生の悲母、一生頂戴・隨身の十一面觀音なり。

この觀音は昔、悲母十八歳のとき、母に別離し、行かれし方、知られず、七八年これを憂いてありしおり、清水寺（京都清水の觀音の靈場）に參詣し、母の所在を知らしめたまえと、七日の日參を祈誓し、六日に當り、路次（清水坂）に於て、十一面の頭（十一面觀音の首から上の御像）をえ、ときをうつさず、願をかけて、『われ母の所在を尋ねて、清水（觀音）に日參のところ、尊像の頭を得、因縁いま然り、われに縁あらしめたまうなり、すみやかに慈悲を施したまうて、わが母に遇わしめたまえ』といひ、（その次日、母の使、上洛して女を尋ね、清水參詣の路にて行き遇えり）。然るによつて即ち御身を作り續ぎて、一生頂戴の本尊となせるものなり。

(二)

また悲母三十七のとき、朝日の光あたたかなるを呑むと夢む。覺めて後ち胎孕してあり。

悲母この尊（觀音）に祈誓していわく、『わが懷妊の子、聖人となり、善知識となりて、人天（世の中）のために益あるべき人たらば、産生を平安ならしめたまえ、しからずば、觀音、威神力を以て、胎内にて朽失せしむべし』と。

祈誓して毎日一千三百三十三拜をなし、觀音經を讀誦し、七箇

月に至つて、やすやす行く行くとき、生下す。路にして生めるに
より、『行生』と名付く。産所は越前の國多禰、觀音堂の敷地な
り。

(三)

然して（悲母は）予が事に於て、萬事この尊（觀音）に祈誓
す。成人無難・出家學文・修道發智、乃至、嗣法・住持・人天の
利濟、悉く皆この尊に祈念せしなり。

あまつさえ予は若年のとき、瞋恚、人に過ぎ、いたざらなるべ
きがごとし。故に悲母またこの尊に祈誓していわく『彼の僧（出
家して修行にまつしぐらである禪師のこと）たとい利根聰明・智
慧拔群なりと雖も、かくのごとく瞋恚増盛にては、人天のために
益あるべからず。大悲（大慈大悲の觀音に呼びかける言葉、願
わくは加被力を以て瞋恚を止めしめたまえ）と、これを祈る。

(四)

ときに、予は十八歳より道心（佛道修行にまつしぐらな心）を
發してあり、十九歳の秋、殊に發心して道を求め、維那（修行僧
を督勵し勤行精進に遺憾なからしめる役位）に充てられ、寺務拔
群（修行道場の面目を全うする所以の執務が拔群）、人人悉く隨喜
（修行道場の役位の人々を初め修行僧たち悉くが滿悅）す。

然るに人あり予に惡口す。（これは寶慶寂圓禪師の道場に於て
の出來事であつた）、予は瞋恚増發し、あわや、大罪を犯さんと
企つ。ときに懺悔して思念す。『予は幼歲より拔群出身にして、今
は發心して職（維那職）に充てられ、望むところは——佛法の統
領となり、人天を化導する——この大願なり。若し惡事を作さ

瑩山禪師の目ざしていられるもの（山田）

ば、この身かならず、いたざらなるべし。自今以後、瞋恚をおこ
さじ』と。

自然（法爾）にして慈悲柔和、いま大善知識となれる、これす
べて悲母祈念の力なり。

(五)

ここを以て、悲母八十七歳（禪師のとき五十一歳）終焉の
とき、この本尊を以て予に讓與す。予は當山（洞谷山）に、入ると
き擊持せり。

當山に一峰を分つて勝蓮峰と名づけ、一院を建立して圓通院と
號す。勝蓮峰の中に、運水峰と粟生原との境あり。當山の本主
（洞谷山永光寺の開基家滋野信直夫人默譜祖忍法尼）に讓與す。

すなわち予の生髮・臍尾もろとも、悲母は隨身頂戴して本尊に加
えたり。祖忍は信心無二・清淨法心なるに依るがゆえに、本尊と
ともに讓與し畢る。仍て生髮・臍尾とも、觀音の臺座の右底に、
白鑽筒に入れてこれを安ず。

盡未來際、當山の鎮護となし、悲母が弘誓度女の祈禱所とな
し、瑩山が弘法利生の祈禱所となす。

後鑑のためこれを記し、以て圓通院の緣起となす。

三

勝蓮峰圓通院緣起を拜讀していると、人間の禪師・家庭の禪
師・そう云つたものが身にしみて感じられてくる。禪師の母
上の家庭が高貴なものであつたことは、洞谷記の中のいろいろ

るの文書によつても想像されるが、世にいうところの恵まれたものではなかつた。ただし母上の観音菩薩への熱誠にして純真なる信仰が、その家庭を偉大な力に満ちたもの、輝かしい智光に漲つたものたらしめた。

禪師は胎兒であつたそのときから、母上のおごそかな祈念の中に育てられた。それが禪師の幼年時代から青年時代のなかごろまでにかけて、禪師を疖癬に苦しましめることもなつたであろう。しかしまたそれが禪師の生涯を、いや禪師の生々世々を、金剛不壞のものにしたと仰ぐことができる。

禪師は十九歳のとき、修行道場の肅正のために、遂に大罪敢行に猛りたち、すわという場にたちいたり、翻然悔悟、事なきを得て以來は全く別人のごとくになり、慈悲柔和の大善知識になり得た、と述懐されている通り、禪師は實におだやかなおかたになられ、洞谷記の記録に見ると、いつも靈夢を感じなされ靈夢に託して事をなされるということになつた。

禪師が靈夢に託していたされるその営みは悉く偉大な成果をあげた。修行者は四方から集つてきた、お弟子はどんどん育つた、檀信の歸依はこまやかになつた、堂塔伽藍はつきからつきから建立された。まことに盛んなるものであつた。

ただし禪師のいたされるその営みが、悉く偉大な盛んな成果をあげていつたそれは、ただ靈夢を感じてなされたから、靈夢に託してなされたからと、いいきることはできぬ。そこ

には禪師の常時不斷の修行精進・佛々祖々嫡々相承の修行精進・佛菩薩擁護の修行精進・禪師の慈母祈誓の修行精進、その通徹していることを看取いたさねばならぬ。

禪師の五十二歳の九月、禪師の御肖像畫に贊を需められて、お書きなされた文字がある、

誰識菴中不死人。未搖掌握鎖煙塵。凜凜威烈無等匹。三尺竹篋奪劍輪。器宇廓落。絕學天真。眉毛爭到不疑地。端的眼睛又不親。

（誰か識らん菴中不死の人。いまだ掌握をうごかさざるに煙塵をせずむ。凜凜たる威烈、等匹なし。三尺の竹篋、劍輪を奪う。器宇廓落。絶學天真。眉毛いかでか到らん不疑の地。端的眼睛、また親しからず。）

とある。禪師は佛々祖々嫡々相承の修行精進に『不死の人』を信證していられる。禪師の修行精進には、いかなるものも匹敵することのできない凜々たる威烈が、深く秘められている。禪師の偉大なる境地、いかなるものにも引轉いたされることのない『不疑の地』は、ピンヅル尊者が来て來つて、眉毛をゆりうごかして説述に力めても、説述しつくすことができぬ。佛々祖々の活眼睛を以てしても看取することができぬのだ。と禪師は御肖像畫の贊に、烈々たる信證を別出いたさ

禪師は母上の信心無二の祈誓力によりて、襁褓の中にいられたそのときから『佛法の統領となり、人天を化導する』念願に生きていられたことが『勝蓮峰圓通緣起』などを讀誦している、まざまざ目に見るごとく窺われる。

禪師が永平寺に上つて、徹通禪師の弟子となられたのは八歳の春であつた。徹通禪師はそのとき、永平寺の第三代（第一代は道元禪師・第二代は懷辨禪師）の住持職を辭して、山麓に養母堂をたてて母と居を同じうしていられた。

瑩山禪師はそのとき既に『利根聰明・智慧拔群』の少年であつたのみならず、少年の純情から、師匠徹通禪師に師事いたされるそのいさおしが忽ちに現われて、『佛法の統領・人天化導の大善知識たる』素晴らしい要機が、このとき既に養われたのであることが窺われる。

瑩山禪師をして瑩山禪師たらしめたものは、母上の『觀音菩薩への信心の純淨』と、徹通禪師の『佛祖の大道への精進の至純』とであつた。洞谷記におさめられている『勝蓮峰圓通院開創緣起』は母上の信心の純淨と瑩山禪師との關係をうなずかせるものであり、『洞谷山永光寺開創緣起』は徹通禪師の精進の至純と瑩山禪師との關係をうなずかせるものである。

『洞谷山永光寺開創緣起』は極めて重要な文書であるから、『勝蓮峰圓通院開創緣起』を前にかかげたそれのごとくに

瑩山禪師の目ざしていられるもの（山 田）

して、左にそれをかかげる。

(一)

元應二年（禪師五十三歳・西紀二三二〇・庚申）除夜の小參に、當山（洞谷山永光寺）の因由を示していわく、

記得す、永平和尙（道元禪師）いわく、百千萬境一時顯。佛現祖來教彼題。試問當門加一拶。千山萬谷幾高低。

（百千萬境、一時にあらわる。——曾て道元禪師が『この法、法位に住して、世間相、常住。春色、百花紅、鸚鵡、柳上に鳴く』と提示いたされた妙境である。徹通禪師はこの提示を道元禪師から聞いて大に省悟いたされるところがあつたことが徹通禪師の傳に記されている——。

佛現われ祖來りて、彼——百千萬境をして、題——唱出せしむ。試みに當門に、問うて、一拶を加うるに。

千山萬谷、幾高低。——道元禪師が正法眼藏阿羅漢の卷に於て『高處自高平・低處自低平と參究す』と示されているそれである。

曾孫、紹瑾、悚息して韻を續く。

無思無覺無生話。鼻孔眼睛自爾題。若令雙肩傳語去。空門終不分高低。

（無思・無覺・無生の話——判斷に涉らない、絶對生活の消息、直證の境界。

鼻孔・眼睛・自爾、題す——法法、法位に住して、自然法爾に、正修行にいそしんでいる。

若し雙眉をして、傳語し去らしめば——眉毛を代表にして傳言の役に立たしめたならば、いかがあろうか。

空門、終に高低を分たす。——絶對生活の妙境であるがゆえに、對立的な抽象的な思量だの傳言だの入れる餘地がない。

是非を把り來つて、われを辨ずること勿れ。浮世の穿鑿、あいかかわらず。(是非相對の論や浮世の批判沙汰など、瑩山の相關するところでない)

(二)

山僧(瑩山禪師)もとより『水月道場に宴坐し、鏡裏の諸人を接得す。如幻三昧に入り、夢中の佛事を作す』。

〈水月道場に宴坐し——とあるのは、佛々祖々正傳の只管打坐の體得を表明いたされた親語である。道元禪師が百千萬境の頌を唱詠いたされているその境地である。瑩山禪師の修行精進が、瑩山禪師をこの境地に終始せしめるのである。〉

古人が『うつるとも月も思はず、うつすとも水も思はぬ廣澤の池』と詠じ、『水の面に夜な夜な月は宿れども心もとめず影ものこさず』と詠じた境地である。

宴坐という語は『中阿含經』などにもあり、『維摩經弟子品』では維摩居士が舍利弗に對して『それ宴坐とは滅定をたたずして諸の威儀を現す(中略)、道法を捨てずしてしかも凡夫事をなす(中略)、煩惱を斷せずして涅槃に入る』云々といえるそれによつて、いろいろの示唆を先覺が感じ來つた語である。

鏡裏の諸人を接待す——とは『諸法は因縁生にして自性なし鏡中の像の如し』という、實踐に終始してあることである。

人々を救護して、毫もそのこだわりをとどめないことである。如幻三昧に入り、夢中の佛事をなす——とは、『一切有爲の法は夢・幻・泡・影のごとく、露のごとくまた電のごとし、まさにかくのごとき觀をなすべし』と金剛經にあるそれのごとくに人々をして轉迷開悟、離苦得樂せしめることである。

(三)

かくあるとき、當山の本主、平氏の女(洞谷山永光寺の開基、平氏の女・滋野信直夫人・後ちの默譜祖忍尼)、山僧を請し此の山(洞谷山)を施與せんと欲す。

最初(このとき禪師四十五歳)、滋野信直と、菴居の地を山中に求め、ときに此の洞を占めて、一坐具の地(佛祖禮仰の靈地・修行の道場)となす。

かえりて(山を下りて)檀主の亭(滋野夫妻の家)に寄宿す。夜、夢むらく『山僧當山の奥頂に蹲して遙かに山下を見るに、主山(裏山)は高く、安山(前方の山)はひくし。天地の間、洞庭の内、忽ち一寺あつて化現す。數閣、棟を並べて、縦横、谷に盈つ。門前の右に當りて大榎樹あり、枝條繁鬱す。方來(四方から)の修行者(群集して、數おおくの破草鞋を懸くる樹たり。』(破草鞋を懸くとは修行者が良き師を得て、行脚に履き破れた草鞋をぬぎて止住し修行すること)

山僧、夢を占いて覺悟す。『山僧もしこの山に止住せば、方來の衲子(修行者)必ず草鞋錢を還すべしという勝地の瑞たり』と。〔草鞋錢を還すとは修行者が行脚の成果を領得すること〕

しかのみならず、次ぎの年、夢みし在所のほとりを見しに、天

生（自然生え）の榎樹ありて、杪、成長にまかせて茂鬱してあり。しかれば山門かならず繁榮すべし。雲ますます群り集りて山谷を埋め、水いよいよ流れ通りて江湖に盈つべし。

奇なるかな、奇なるかな。寤寐合一、夢覺一致なり。ゆえいかんとなれば、行脚僧を雲水と稱す、師を尋ね道を訪う事をなす。山に梯し海に航し、或は東し或は西し、南に向い北に向う。居所を定めず、透々として行脚し、騰々として登り往き、漸々として下り去る。雲のごとく水のごとく、山を盡くし海を窮む。草鞋を著け、拄杖を肩にす。若し機縁の善知識を覓め得ば、直に行脚の正法眼を開明す。即ちこれ草鞋錢を還すなり、拄杖を拗折する處なり。これ衲子（修行者）の通規なり。

四

憶うにそれ、始めて（洞谷山に）茅屋をむすばんとせしとき、（禪師四十六歳）、十六羅漢の内の第八伐闍羅弗多羅尊者、山中に來まして夢に入る。

山を看、熟視して、瑾上座に（禪師に）告げていわく『當山は小さき所なりと雖も頗る勝地たり。障礙の神の所居に當らず、興化門の事、願いのごとく成就すべし』と。

仍て茅屋（假庫裡）をむすびて、方來（諸方から集り來る修行者）を接待せり。茶湯には松葉を點じ、器物には柏葉を用う。始め施供（供養の米など）を受くるに、合子を以て糲アヌとなす。糲アヌいまだ治定せざりき。

人あり（それより四年を過ぎ、禪師五十歳のとき、滋野信直の夫人の實兄・中川の地頭・酒匂平八賴基）、函丈（住持人の居室で

瑩山禪師の目ざしていられるもの（山田）

もあり、修行者を接待する場所でもある）を施し、雲水を接待せしむ。

五

遠く洞山を慕い、近く感夢を重んじ、合せて『洞谷山大榎峰永光妙莊嚴院』と號す。

三寶・二聖に憑り、二天を供養の檀越となし、山神・土地・招寶に課して、打給使者となす。ここに於て初夏安居す。

（修行道場永光寺の造營が一應完了したのである。このとき禪師五十一歳である。寺號の選定・諸堂の名稱・三寶・二聖・二天等のことが、洞谷記の別のところに詳細に記されている。その一節にいわく、『予は洞山（良价）高祖十六世の法孫なり。ゆえに彼の家風を慕うて、山名を洞谷となす山を改めて谷となすは、曹溪を轉じて曹山となすがごとし。太陽（警玄）高祖十一代の法孫なり。ゆえに太陽の盈目を慕いて永光寺と號す』と。またいわく、『佛殿を最勝殿と稱す。最勝王經を説く時は、觀音・虚空藏、脇士たるものなり。心空の兄弟ヒシヤイを思うゆえに、僧堂を選佛場となす。喫飯得力を思うゆえに、庫下を香積院と號す。沐浴開悟を思うゆえに、浴室を明水因と號す』と。またいわく、『中尊釋迦牟尼佛は加賀國井家の庄・中田右馬尉、悲母十三回忌追善のために、三十貫を以て木作す。瑩山五十貫を以て飴を奉る。左脇士觀世音菩薩は洛陽高辻大宮・駿河法眼定齋、先考定守法眼十三年追弔のために木作す。右脇士虚空藏菩薩は加賀國富樫庄野市の藤次、自身の現當願望、皆令満足のために木作す』と。またいわく『二天は毘沙門・迦羅天なり』と。

(六)

當國（能登）長者澤の所に於て、都寺（紹碩和尚）侍者（祖溪和尚）、天運に糲を得て、寺庫に納めてより、三年に滿つ。臘八の夜、坐睡のとき此の糲、夢に入る。老僧の面前にあつて側ち立つ。予加持して（佛力を仰いで）使用せんと欲するとき、檀越、同じ曉にまた夢む。人ありて大飯饈を予に供じ、予喫飯し、餽飯を他に施すと。

ゆえに此の糲を老僧の鉢盂にくらぶるに三分の二に當り、自然に佛子の節量食に應ず。それおもんみるに、虚空の量を鉢盂となし、一合相を以て器物となす。受用することは人に隨う、分量には定めあらず。

今夜、節分・除夜に當る、明朝は歲旦・立春なり。鉢盂の無窮の法喜食を運らすに、長者澤の衆寶涌出の糲をもつてす。

ここをもつてのゆえに、或るときは一合衆寶の糲を以て一斗をなし、或るときは人天應供の鉢盂を以て一糲となす。極大は小に同じく、極小は大に同じし。白毫覆育の恩恵（釋尊の遺しおかれた恩恵）、遺弟これを愛用す。喫飯の人は喫飯す、喫飯の人なり。粥にても足り飯にても足る。おのずから一粒を費さざるの氣概を具す。

ゆえに、斗を以て糲となすもまた得たり、糲を以て合となすもまた得たり。小を要するとき小を使い、大を要するとき大を使う。佛道はもとより豊儉（豊富とか儉素とかいうこと）より超出す。ゆえに主事かならず大量を運用し來れり。

しばらく日食を以て一斗に擬するとき、三分に分つて二分は三

寶敬田の供養（佛さまへの御供養）に調え、一分は下輩悲田の食料（氣の毒な人の食料）に充つ。多少とも同じく營事の比丘の手段に隨う。大小おのずから人天供給の天福にまかす。衆もとより有限の衆にあらず、福かならず無窮の福を招く。

衆たとい多寡あるも、食は日料をもつて當つ。飯となし得べくんば飯となし、飯となして足らずんば粥となし、粥となして足らずんば米湯となす。芙蓉（道楷禪師・粥飯のこと）に心を勞せず、佛祖の慧命相續にまつしぐらであつた大善知識の家訓を傳え通ぜんと欲す。知事（修行道場の役僚）大心をめぐらして、十方僧（諸方から來集する修行者）に供ずべし。典座、三徳を調え（輕軟なるもの・淨潔なるもの・作法にかのうたものを調理すること）、三福田（三福田とは敬田すなわち佛法僧と、恩田すなわち父母と、悲田すなわち貧苦な人々）を修すべし（ないがしろにすべからず）。釋尊二千年の遺恩あり、盡大地これを受用して窮み無し。

且問す大衆、へときにどうだ、修行者たち、窮み無き福業、またいかん。

——やや久しうしていわく、幽谷、關鑠の意に拘わらず。往來、なんぞ兩頭の人に涉らんや。禪師はこの二句に於て、絶對生活者の自由無礙なる自由境を頌していられる。

この小參（右述べ來つた提示）を以て、當山の縁起を明らむべし。委細は記録に留む。以て來際の後鑑となす。云々。

元應三年辛酉、孟春の日記す。

五

『洞谷山永光寺開創緣起』を禪師が文字にいたされたのは、奥書にあるごとく元應三年の孟春で、禪師五十四歳の元旦である。この年から禪師の日常が極めてお忙しくなつた。來りて禪師の導きを仰ぐ修行者は日に月にその數を増し、寺院の興隆、特に總持寺の建立という大事業を開始いたされることとなつた。幸に峩山・明峯・等の大弟子があり、檀信の心血をささげての寄進があつて、禪師畢生の大事業がほぼ完成を見るに至つたのは、わずか四年の後であつた。禪師がかねがね申されていたごとくに、修行者が山に群る雲のごとく、湖に集る水のごとく群り集つた。その夏安居に入つて間もない日であつた、禪師は極めて重大な提示をいたされた。それが洞谷記に次のごとく記録されている。

同（正中二年乙丑五月）廿三日、兩願を發していわく、

生生世世、化度利生し、等正覺に至るも乃至、過遠遠の罪ありて微も消すること能わざるあるも、以てわが珍寶となして、あらゆる衆生を救済すべし。別の願は一切これを管せざること、これ操行なりと雖も、（今左にあぐる）此の兩願は私ならず。

一つの願は、菩提心を生生に發すこと。これは本師（ここでは正師の意味）寶慶圓和尚の所に於てせしもの。（それは禪師十九歳の秋であつた）、これはこれ慈氏菩薩（彌勒菩薩）證明をなし

たまえるもの。ゆえに、身命を顧みず、生生世世、本願のごとく護持すべきものなり。

一つの願は、今生の悲母懷觀大姉の最後の遺言（禪師五十一歳のとき、母上八十七歳にて逝去いたされたそのときの遺言）、領納しておこせし願なり。これまた（母上は）女流濟度の菩薩なり。敢て欺くべからず、遺命に任せてこれを護持すべし。

三世の諸佛・歴代の祖師、および首楞嚴經（彌勒菩薩の神通力のこと、魔女が救われたことなど記されている、三昧經）、一切の諸經、予が金剛の二願心を加護し擁護したまえ。

佛意にかなわば、必ず靈夢を感じべしと思念しつつ打眠す。即夜の曉天に夢を感じ、いわく、

身に隨え所持せる舊衲・袈裟、久しく搭著せず。今搭著せんとして披き見れば、鼠の巢あり、牛糞馬糞および馬尾・人毛など、諸の不淨・塵穢、これを汚染す。即ち打ちふり捨てて著用せり。

誠に奇夢なり、瑞夢なり。本願あらたに成る瑞相なり。佛祖感應、兩願を證明したまうなり。

と記録されている。洞谷記のみに限らない、瑩山禪師の親言親語を拜覽していると、今ここにかかげた兩願——菩提心を生生世世に發して永劫に修行精進してやまないという金剛不壞の大願と、女人濟度の弘誓を盡未來際に堅持して、最後の一人をまで救護しつくさねばやまぬという金剛不壞の大願、この兩大願完遂に、その五十八年間の御生涯をかけて、まっしぐらでいらせられたことが、禮仰いたされる。

兩大願完遂の方式、それが佛々祖々嫡々相承の『只管打坐』であること勿論である。しかして、禪師は只管打坐の絶対境
『水月道場に宴坐して、鏡裏の諸人を接得す。如幻三昧に入りて、夢中、佛事を作す』
の消息を、と開顯いたされている。

禪師は更にその開顯の場、それが『堂塔伽藍』であり、その妙行が『法式行法』であると信證いたされた。

禪師の師匠徹通禪師に堂塔伽藍建立の鴻圖があり、瑩山禪師に瑩山清規があつて、法式行法の次第およびその威儀についての懇諭があることを以ても、その一斑を窺うことができる。

瑩山清規には『法式行法』について、日分・月分・年分の別が示されている。

その法式行法は多種多様であり、それぞれ独自の意義があり威儀があるのであるが、その一つ一ついずれのどのところにも通徹しているところの要機がある、それは『端坐・合掌・歸佛』である。『端坐・合掌・歸佛』の通徹していない法式行法はあり得ない。

堂塔伽藍が淨潔に嚴飾いたされて、華が匂い香がかおる、その會座で法式行法が敬虔に修行いたされる。比丘・比丘尼・信男・信女の身心に聖感が満ちあふれる。

法式行法の聖感そのままに、それぞれ比丘も比丘尼も信男

も信女も、その職域に入る。その人のその時その處での營みに精進する。その營みが私的のものであれ、公的のものであれ、家庭的のものであれ、社會的のものであれ、教育的のものであれ、實業的のものであれ、その營みに『端坐・合掌・歸佛』の聖感が通徹して堅持されている。

かくあるときに、正法眼藏辨道話に『世務は佛法を礙ゆと思えるものは、ただ世中に佛法なしとのみ知りて、佛中に世法なきことを知らざるなり』と親示したもうている聖語の眞義が身心に徹して禮仰いたされる。

世中には、佛法はない。

佛中には、世法はない。

佛中には、世法はないのである。

われらは、佛中に生きることへ端坐合掌歸佛の聖感の中に生きることに、まつしぐらであらねばならぬ。